

研究発表もうしこみフォーム

氏名：サラントヤ

氏名のローマ字表記：Sarantuya

所属：東京大学大学院総合文化研究科博士課程・満期退学

専門分野：モンゴル近現代史

発表のタイトル：清末におけるモンゴル人の留日体験

—パルタ（帕勒塔）王の場合—

発表要旨（600字～800字程度）：

本報告では、1906年に来日した東路旧土爾扈特部右旗郡王パルタ（1882-1920）氏の渡日経緯・日本における三年間の学習生活及び交流活動を当時の文献史料に基づいて実証的に検討し、清朝・日本・露国と言った外部の勢力に翻弄されながらも近代化への模索を試みる清末モンゴル王公の挑戦と苦戦の一側面を検討したい。この考察はさらに、日露戦争前後の日本による対モンゴル工作の実態や清末留学生史研究の広がりにも寄与できることを期待したい。

管見の限りで、パルタ王の来日に注目した研究は、横田素子と赤坂恒明らによる史料紹介のほか、専ら彼の留学に着目する研究は皆無である。既成の研究は、パルタ王の家系や辛亥革命期の活動に焦点を当てたものが多い。もちろんそこで同王の留日に関する言及もあるが、本報告で明らかにする通り誤った解釈も散見される。

報告者は、従来の研究を踏まえながら、日本の外務省外交史料館や宮内公文書館に残存する公文書及びパルタ王の来日に関わった関係者による関連文章・寄稿を仔細に読み込み、または当時の新聞雑誌の記事をも援用することで、同王の留日背景・そのプロセスを整理したい。

周知の通り、日清戦争敗戦以後、清朝には日本を第一留学先とする留学事業が始まり、特に1901年の辛丑新政において、留学生派遣政策が定められ、各省を中心に留日ブームが形成した。一方、清朝は、モンゴル王公の日露との接近・連携を恐れ、モンゴル人学生の日本留学や王公による短期の「出洋遊歴」の奏請も裁可しなかった。つまり、清末の留学生派遣政策はモンゴル地域に適用されなかったわけである。しかし、パルタ王が留日することが出来たのはなぜだろう？その背景にあった要因を究明する必要がある。これは、パルタ王の行動だけではなく、清末のモンゴル王公の直面した諸問題やそれに対する王公たちの認識を確認する上でも軽視できない重要な課題である。本報告で、それらの課題を検討する。